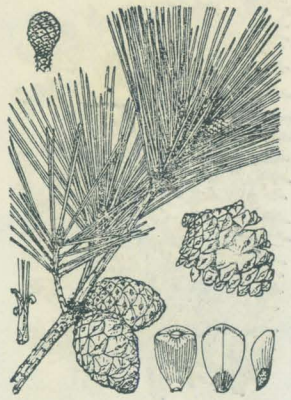
第3863図



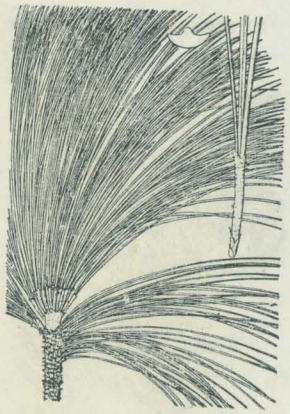
まつ科

たぎょうしょう（多行松）

Pinus densiflora *Sieb. et Zucc.*
var. umbraculifera *Mayr*

アカマツの園芸変種の一つで、高さ4m位まで、根元及びその附近から多数の枝に分岐し、斜上して、円味ある平頂の樹冠を作るもので、庭園の植込みに使う。小木なるにかかわらず毬果を作る現象がある。アカマツ及びクロマツが混生する地方には屢〻樹型、樹皮、葉の横断面における樹脂道の位置等に中間的の形質を示す株がある。その大部分は両種間の自然雑種とみてよい。一括してアイグロマツ（P. × densi-Thunbergii *Uyeki*）という。

第3864図



まつ科

だいおうまつ

Pinus australis *Michx.*
（=P. palustris *Mill.*）

北米東海岸地方の原産、暖地には屢〻栽植されている常緑喬木で、高さ30mを越えるが、日本ではまだ大木はない。甚だ粗大な分枝をなし、ほうき状に枝端に集合して垂れた長い葉と相俟って特殊な景観を作る。枝は淡灰褐色、材には樹脂が多い。芽は灰白色の縮れた毛で包まれ通常粘らない。葉は3葉束生、3–4年生存し、長さ40cm内外で蒼味のある緑色、断面に於て、樹脂道は葉肉内に埋まり、下表皮とは距たる。毬果は円柱形で長さ20cmに達し、種鱗の末端部には鋭稜がある。現在日本では開花がまれである。和名は大王松で葉の長大なるをたたえていう。

第3865図

まつ科

やくたねごよう

一名あまみごよう

Pinus Armandi *Franch.*
var. amamiana *Hatusima*
（=P. amamiana *Koidz.*）

九州の屋久島及種子島の一局部にのみ自生する常緑針葉喬木で、高さ10m、径1mに達するが、近時絶滅に傾きつつあるは惜しい。支那奥地及び台湾には学名上の基本形タカネゴヨウを産する。五葉松の類でチョウセンゴヨウに近いが毬果は小さく長さ8cm内外で卵状楕円体、種鱗は広楔形で前縁が唇状に肥厚して外捲し、また内面には種子を蔵する陥入部が著るしい。種子は無翼。葉は5–7cm長、蒼味を帯びた緑色。鹿児島には稀に栽培がある。和名は屋久種子五葉で産地に基ずく。アマミゴヨウの名は奄美諸島に自生がない点から廃して前者を採用した。

ぐいまつ

Larix Gmelini *Gord.*

色丹、エトロフ両島及び樺太から沿海州オホーツク、カムチャッカまで分布する落葉針葉喬木で、湿地を好み純林を作る。北海道本島には現在野生はみないが、植林がみられ、また泥炭地に花粉が検出されるから過去に分布した事を指摘できる。カラマツに酷似し、区別困難であるが、それとの間には広い分布の不連続があるし、一般に葉が短かく、1年生枝は短毛を生じ、毬果の種鱗は卵円形で外側に乳頭毛を生ぜずまた外へ反捲もしない点で区別できる。和名はアイヌ語のクイから来ており、それは黒い木の意で、冬季その林が落葉した後の枝が黒々と見えるに因るという。

第3866図

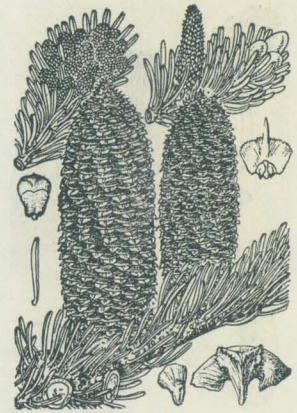
まつ科

あおとど

Abies sachalinensis *Fr. Schm.*
var. Mayriana *Miyabe et Kudo*
（=A. Mayriana *Miyabe et Kudo*）

北海道の西南部の山野に自生の同地方の主要常緑喬木で、高さ30mを越え径1mに達する。直幹は老齢になるも、灰青色で平滑割目がない。若枝には茶褐色の毛があり、シラビソよりも稍せた広線形の葉を左右振り分けにつける。長さ3cm前後、先端浅く割れ、濃緑色、裏の気孔条甚だ白く、摑んでもモミの如く硬くない。毬果は円柱形で7cm長内外、熟するにつれ、灰黒紫色から次第に緑を混ずる。種鱗は腎臓形に楔形の脚があり、褐色毛を外側に密布、巾15mm、苞鱗は種鱗より著るしく超出外捲し、淡黄褐色、特異の外観を呈する。和名は次条のアカトドに対して苞鱗の色緑に近きに依る。パルプ用材として最も重要な一つである。

第3867図



まつ科

あかとど

Abies sachalinensis *Fr. Schm.*

北海道における重要針葉樹で、西南部のアオトドに対して北部より東部にかけて分布する。中央高地では屢〻混淆するが多くはアオトドよりも上位を占める。形態は互に似るが一般に大木となれば樹皮は紫褐色を帯びて裂目を生じ、毬果の苞鱗の突出した部分は短かく、且つ赤褐色、後に褐色化し、多くの個体にあって種鱗と同長、又は却って短かいものもある点で区別される。利用面は同じであるが、分布の中心を異にするもので南千島及樺太にも生ずる。パルプ資材、土木建築用材として用途が広い。

第3868図

まつ科